

【二】「読解」次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

晩秋のある日、つめたい川にだれがいちばん長く入っていられるか競争し、歩けなくなるまでがんばった兵太郎君はその後ずっと学校を休んでいる。久助君は、兵太郎君が死ぬのではないかと心配していた。

①久助君は、ほかの友だちとわらったり話したりするのが、きらいになった。そして、ひとりではぼんやりしていることが多かった。それから、ひどく忘れっぽくなった。なにかし忘れてしまうようなことが多かった。いま手に持っていた本が、ふと気づくと、もう手になかった。どこにおいたか、いくら頭をしぼっても思い出せないというふうであった。お使いにいつて、買うものを忘れてしまい、あてずっぽうに買って帰って、**1**ラジオで聞く落語みたいだとわらわれたこともあった。

もともと久助君は、どうかすると見なれた風景や人びとのすがたが、ひどく殺風景にあじけなく見え、そういうもののなかにあって、じぶんのたましいが、ちようど、いばらの中につっこんだ手のように、いためられるのを感じることがあったが、このごろはいっそうそれが多く、いっそうひどくなった。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間は生まれて、生きなければならぬのかと思って、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあった。**2**、つめたい水にわずか五分ばかりはいっていただけで、病気にかかり死なねばならぬ（久助君には、兵太郎君が死ぬのと同じか思えなかった）人間というものは、**3**みじめな、つまらないものに思えるのであった。

三学期のおわりごろ、**4**兵太郎君が死んだというのを、久助君は耳にした。べんとうのあと、久助君は教だんのわきで日なたぼっこをしていた。すると、むこうのすみで話しあっていた一団のなかか

20

15

10

5

ら、

「兵タンが死んだげなぞ」

と、ひとりがいった。

「ほうけ」

と、ほかのものがいった。べつだん、おどろくふうも見えなかった。

久助君もおどろかなかった。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。

「うらのわら小屋で死んだまねをしとったら、ほんとに死んじゃったげな」

と、はじめのひとりがいうと、ほかのものは明るくわらって、兵太郎君の死んだまねや腹痛のまねのうまかったことを、ひとしきり話しあった。

久助君は、もう聞いていなかった。ああ、とうとうそうなってしまったのかと思った。そつとかた手を、ゆかの上の日なたにはわせてみると、じぶんの手はかさかきして、くたびれていて、悲しげに、みにくく見えた。

日ぐれだった。

久助君のからだのなかに、**②**ばくぜんとした悲しみがただよっていた。

昼のなごりの光と、夜の先ぶれのやみとが、地上でうまくとけあわないような、みようにちぐはぐな感じの、ひとときであった。

久助君のたましいは、長い悲しみの連鎖のつづきを、くたびれはてながら旅人のようにたどっていた。

六月の日ぐれの、びみょうな、そして豊富な物音が戸外にみちていた。それでいてしずかだった。

久助君は目をひらいて、柱にもたれていた。なにかよいことがあるような気がした。いやいや、まだ悲しみはつづくのだという気もした。

5遠いざわめきのなかに、ひと声、子山羊の鳴き声がまじった

45

40

35

30

25

のを聞きとめた。久助君はしまったと思った。生まれてからまだ二十日ばかりの子山羊を、昼間川上へつれていって、こん虫を追っかけているうち、つい忘れてきてしまったのだ。しまった。それと同時に、子山羊はひとりで帰ってきたのだと確信をもって思った。

久助君は、山羊小屋の横へかけだしていった。川上の方を見た。

子山羊は、むこうからやってくる。

久助君には、ほかのものはなにも目にはいらなかった。子山羊の白いかれんすがただけが、——子山羊と自分の地点をつなぐ距離だけが見えた。

子山羊は、立ちどまっては川つぶちの草をすこし食み、またすこし走っては立ちどまり、無心に遊びながらやってくる。

久助君は、むかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまできるので。

子山羊は、電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あの土手のこわれたところも、うまくわたったのだ。よく川に落ちもせず。

久助君は胸があつくなり、なみだが目にあふれ、ぽとぽと落ちた。子山羊はひとりで帰ってきたのだ。

久助君の胸に、ことしになってからはじめての、^③春がやってきたような気がした。

久助君はもう、兵太郎君が死んではいけない、きつと帰ってくる、という確信をもっていたので、あまりおどろかなかった。

教室にはいると、そこに、——いつも兵太郎君のいたところに、洋服にきかえた兵太郎君が、白くなった顔でにこにこしながらこしかけていた。

久助君は、じぶんの席へついてランドセルをおろすと、目を大きくひらいたまま、兵太郎君を見てつつ立っていた。そうするとしげんに顔がくずれて、兵太郎君といっしょにわらいだした。

兵太郎君は、海峡のむこうの親せきの家にもらわれていったのだ

75

70

65

60

55

50

が、どうしてもそこがいやで、帰ってきたのだそうである。それだけ久助君はひとから聞いた。川のことかともとで、病気をしたのかしなかったのかは、わからなかった。⁶、もうそんなことはどうでもよかった。兵太郎君は帰ってきたのだ。

休けい時間に、兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのをまどから見るとき、久助君は、^④しみじみこの世はなつかしいと思った。そして、めったなことでは死なない人間の生命というものが、ほんとうにとくとく、美しく思われた。

そこへもうひとつ思い出すことがあった。それは、きよ年の夏、兵太郎君と川あそびにいて、川からあがったばかりの、^⑤びかびか光るおたがいのはだかんぼうを、おいしげった夏草の上でぶつけあい、くるいあって、たがいに際限もなくわらいころげたことだった。

(新美南吉『牛をつないだ椿の木』所収「川」より)

85

80

〔設問〕 解答はすべて、別紙の解答用紙の解答欄におさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

問二 ——線①「久助君は、ほかの友だちとわらったり話したりするのが、きらいになった」とありますが、それはどうしてですか。文章中の言葉を使って六十字以内で答えなさい。